

スノープス一族の終息 —The Mansion の世界—

田 中 久 男

Faulkner の18作目の長篇小説 *The Mansion* は、スノープス三部作の最終巻として、1959年11月に出版された。作者が創作活動の中で一番長く付き合ってきたスノープス一族の物語、即ち“the thirty-four-year progress of this particular chronicle”³¹ は、この作品でもってようやく完結したわけである。1956年12月13日と推定される Else Jonsson (スウェーデンのジャーナリストの夫人)宛の手紙で、作者は現在執筆中の *The Mansion* を書き終れば、“maybe then my talent will have burnt out...”³² だと述べ、執筆がすでに終わっていた1959年7月26日付と推定される Harold Ober (作者の文学エージェント)宛の手紙で、“Having, with THE MANSION, finished the last of my planned labors...”³³ とまで言っている。このあと *The Reivers* (1962) が発表されているが、作者は *The Mansion* できれいにスノープス一族の物語の片を付けておきたいと思ったばかりか、この作品が自己の創作力の燃焼の最後の機会として、これまでの作品で創造した人物たちを含めて、ヨクナパトーフ郡という南部の縮図としての社会を、時間的、空間的に俯瞰して総括しようとしたようにも思われる。

Blotnerによると、この作品に対する書評では、*The Town* (1957) 同様、物語の展開が散漫で、創作力の噴出というよりは、技巧の練達を感じさせるといった評価がなされたが、また一方では、Mink のセクションは秀れた出来ばえを示すものとして、好評を博したようである。⁴ Faulkner は一体に、悲劇的な状況で苦しむ人物とか、あらがいが難い宿命に引きずられるように破滅的な人生を辿る人物を描く場合、例えば Joe Christmas とか Thomas Sutpen 等の物語に、創作力の冴えが顕著に出てくる傾向を持っている。この作品の Mink の物語に感じられる創作力の冴えも、作者のこの特質から主に出ていると思われる。しかし単にこれだけではないようである。作者がある意図のもとに、前二作 (といっても専ら *The Hamlet* [1940] の場合) の Mink 像を微妙に修正、肥大させながら、この人物の中に自己の思いを隠微に流し込もうとしたところにも、Mink の物語が放つ生彩の一因があるように思われるのである。

本稿では、作者のこの意図を考えながら、*The Mansion* の構築に Mink が果している役割、あるいはその意味を、他の人物たちとの関連において考察し、次に、研究者の間で解釈の相違が見られるスノープシズムの本質等の問題にも少し触れてみたい。

[1]

The Mansion は、Mink (1~5章)、Linda (6~11章)、Flem (12~18章) という三つのセクションの順に配列されていて、スノープス一族の自壊⁵ というこの作品の主題に収斂するように構成されている。この構成を緊密に効果的にするために、綿密な配慮がなされている。もちろんこの作品には、スノープス三部作の前二巻の内容の繰り返し、要約、言及といった部分もかなり含まれているので、読者は二番煎の物語を聞かされているような感じがしなくもない。しかし三部作におけ

るこの作品の位置を考慮しながら読んでみると、それらは単なる繰り返し、要約などではなく、時間の進行の大きな幅の中で、人物、エピソードを巨視的、多角的に捉えるために使われていることが分かるはずである。

Mink のセクションの冒頭、つまりこの小説の始まりには、彼が Houston 殺害の罪で終身刑を宣告される場面が置かれている。⁹⁾ これによって読者は、*The Hamlet* 中の 1908 年の世界に連れ戻され、それから Mink の Houston 殺しの背景が、*The Hamlet* の場合よりもいっそう鮮明な形で大写しにされ、いささか変更を加えられて示される。この背景の中で Houston と対比されながら、Mink に関する二つの点が強調されている。一つは Houston の富裕な生活ぶりに対する Mink の貧窮ぶりであり、もう一つは Houston の倨傲と狭量に対する、Mink の片意地なまでの情念の徹底さと耐える姿勢である。第一の点に関しては、例えば Houston の富裕さが、“alone on that big place with two nigger servants, the man and the woman to cook, and the stallion and the big Bluetick hound...” (p. 10) というふうに説明されるのに対して、Mink の唯一の家畜は “the barren and worthless cow” (p. 9) で、家は “the paintless and repairless tenant cabin” (p. 9) であり、“a dollar or two of the gewgaw finery his wife and his two daughters were forever whining at him for” (pp. 12-13) を買うことも自由にならぬほどの彼の赤貧ぶりが強調されている。

一方、第二の点に関して作者は、*The Hamlet* におけるエピソードを幾分修正して、Mink の怒り、精神の緊張の度合が強まるようにしている。つまり *The Hamlet* においては、Mink が Houston の牧場で一冬過ごさせた自分の子牛 (yearling) を取り戻そうとして相手に拒否され、裁判にかけたが 3 ドルの囲い料 (pound fee) の支払いを命ぜられる、という状況設定になっている。ところが *The Mansion* では、Mink が自分の雌牛 (cow) を取り戻すのに 18 日と半日間 Houston の牧場の新しい柵作りの仕事を余儀なくされ、そしてこの仕事が終わった日に雌牛を取りに行かなかつたために、相手から “that-ere extry one-dollar pound fee” (p. 39) を要求される、というふうに状況が変更されている。このエピソードで強調されているのは、Houston の “arrogance and intolerance and pride” (p. 7) に対する Mink の “patience was his pride” (p. 22) という態度、生き方である。しかし強調されているのは、単に彼の愚直なほどの耐える姿勢だけでなく、感情を持った生身の人間としての尊厳、譲ることのできない権利、あるいは生活の場での正義といったものに、自分の生活の一切を犠牲にしてまでも、一途にこだわり続けようとする彼の性格である。このことは、“simple justice and inalienable rights” (p. 12) という類の言葉とか、“...his own bad luck had all his life continually harassed and harried him into the constant and unflagging necessity of defending his own simple rights.” (p. 7) といった文章によって示されている。

社会の底辺での Mink の赤貧ぶりは、*The Hamlet* においても十分感じ取れるし、Houston 殺害を “the vindication of his rights and the liquidation of his injuries” (*H*, p. 218) と説明する作者の言葉からも分かるように、人間存在としての尊厳、権利、感情に固執する彼の姿勢も窺うことはできる。しかし *The Mansion* において、Mink と Houston が対比的に描写されることによって、彼が横柄で偏狭な Houston の被害者、犠牲者であるという感じが強く出てくる。と同時に、彼が一徹に耐える姿勢を貫くことによって、自分を不運に押し込める境遇、あるいはこの世の中の仕組みに、自己の破滅を代償としてでも抗議の姿勢を示そうとする、妻まじい情念の持ち主で

もあるかのような人物像が浮かび上がってくるようにも思われる。これには作者の視点の使い方も関わっているのは否めない。というのは、三人称の客観的視点で書かれているはずの箇所において、Mink の視点が使われているところがあるからである。それは例えば、“a durn sullen son of a bitch [Houston] that didn't even know he was lucky...” (p. 11) とか、“the only person [Flem] who had the power to save him [Mink] and would have had to save him whether he wanted to or not because of the ancient immutable laws of simple blood kinship” (p. 5) 等の叙述の中に覗いて見える。この視点の操作は、作者自身が Mink に同情を寄せている微妙な証しと考えて間違いない。この同情を Brooks は、“dramatic sympathy”⁷⁷ という言葉で表わしている。

この視点の操作と、先に触れた Mink の性格づけは、のちに起こる彼の Flem 殺害の用意周到な準備になっている。彼は人間生活の基底にある血縁感情を重んずるタイプの人間だが、この血縁感情が従兄弟の Flem に裏切られ、刑に服することが決ってからでは、“He didn't have to bother and worry at all now since all he had to do was wait...” (p. 42) なのである。彼には“that unshakable, that infinite patience” (p. 43) という驚嘆すべき特質があるが、これは、Mink が 38 年という長い刑期を耐え抜く精神の強靱さを持っていることを保証するものである。と同時に、彼の Flem への復讐の気持が朽ち果てることなく保持されるだろう、ということも保証してくれるはずである。“...the ensuing retelling of Mink's murder of Houston is clearly set within the larger pattern of revenge yet to be effected, his murder of Flem.”⁷⁸ と Creighton が言うように、Houston 殺害の航路が Flem 殺害に連なるものであることを、十分に暗示している。

〔Ⅱ〕

Linda のセクションは、表面的には Mink の復讐の物語には関係がないように見える。このセクションの現在の物語の時間は、彼女が戦傷帰還兵として帰郷する 1937 年の時点から始まっている。しかしこのセクションで説明される出来事あるいはエピソードは、この 1937 年以降のもの、および *The Hamlet* と *The Town* で描き込まれたそれらの要約、言及などの他に、Gavin Stevens と Ratliff がニューヨークでの Linda と Barton Kohl の結婚式に立ち合ったこと、この夫婦がスペインの内戦 (the Spanish Civil War) に参加し、夫が戦死したこと等、Linda が 1927 年にニューヨークに発ってから帰郷までの範囲に及んでいる。その上、作者がこれまでに発表した作品の人物たち、例えば Benjy, Quentin などの Compson 家の人々、Sartoris 家の双子の兄弟等だけでなく、Joanna Burden, Captain McLendon, Byron Snopes 等の人物たちのことが説明されている。更に、読者にはなじみの Jason Compson とか Ike McCaslin (主に前セクション) が陰に陽に顔を覗かせる。こうした人物たちに関する説明、あるいは彼らの登場によって、*The Mansion* は Vickery の言うように、“the nostalgia of reminiscence”⁷⁹ の雰囲気を持っている。しかし、これは単に郷愁を呼び起こすという消極的な働きのために使われているのではなく、ジェファソンという小さな町を、一つの有機体として時間的、空間的に濃密にする働きをしている。と同時に、小さな共同体とそこに住む人間たちにも、否応なく変化をもたらす時間の作用を感じさせる。¹⁰

この時間の作用は、Linda の中に端的に見て取れる。彼女は 1936 年にユダヤ人の彫刻家で共産主義者の Kohl と結婚し、1937 年に寡婦の聾啞者となって帰郷する。故郷では共産主義者として、二人のフィンランド人の共産主義者と“hope, millennium, dream” (p. 222) を語り合い、“the igno-

rance and superstition which would counteract, cancel her dream” (p. 223) と闘いながら、黒人の向上のために彼らの学校にも関与し、“Negro Sunday school classes” (p. 244) を行なう。FBIの捜査の手が伸びるようになって、Stevens の勧めで1941年にパスカグーラの造船所にリベット工として離郷する。これが Linda のセクションにおける彼女の略歴である。しかし作者は、この略歴の背後に存在するアメリカと世界の政治的、社会的動向への言及を時折さしはさみながら、Linda という個人に明白に及んだ時間の作用を巨視的に捉えようとしているのである。例えば、“...now we watched the lights go out in Spain and Ethiopia, the darkness that was going to creep eastward across all Europe and Asia too, until the shadow of it would fall across the Pacific islands until it reached even America.” (pp. 177-178) という類の文章が多く織り込まれている。これは、Steinbeck の *The Grapes of Wrath* (1939) における中間章、あるいは Dos Passos の *U. S. A.* (1938) の “Newsreel” に似た性格、つまり、登場人物たちが置かれている時代の表情、あるいは歴史の顔を映し出す役割を持っているが、これらの作品ほどスケールは大きくない。しかし作者の意図は明白で、Linda が “advanced in liberalism” (p. 210) な Kohl と同様ののちに結婚し、共産主義思想に染って行った背景としての1930年代の時代のうねりを伝えながら、世界の新しい空気を吸って変貌した彼女が、この作品の主題である「スノーブス一族の自壊」に関わって行く基盤を作り出そうとしているのである。

Linda はニュー・ヨークに行く前から、“the only thing he [Flem] loved was money” (p. 143) だと気づいていたに違いないが、自分の母 Eula と Flem との夫婦生活、彼女と Manfred De Spain との情愛関係、母の自殺のことなどを考え、結婚式のとときに真の父親の Hoake McCarron に出会うことによって、自分と Flem との間に大きな精神的な溝を作ったことは想像に難くない。しかし作者は、この溝を単に個人的な感情の相においてだけでなく、時代的、社会的な相においても捉えようとしたために、Linda が辿る人生を、時代のうねりという大きな外的な状況の中に置いたのではないと思われる。次のセクションで彼女は、Mink が出所すれば Flem への復讐に向うことを十分承知の上で、Mink の刑を2年短縮してもらい請願書を作成するが、これは確かに一面では、Flem に対する彼女の個人的な恨み、反感、憎しみを晴らすための復讐、あるいは Ratliff が考えるように、母 Eula のための復讐 (p. 431) を行なおうとする動機が働いたことは十分考えられることである。しかし Linda が間接的ながら Mink の復讐に手を貸したことは、大人の世界に参入し、共産主義思想に触れて変貌した彼女が、“respectability and aristocracy” (p. 153) の世界に上昇しておさまっている Flem に対して、あの種の人間的、社会的正義を求めた表われとも考えることができるように思われる。

Linda のセクションは、前のセクションで Mink がメンフィスで古いピストンを購入して Flem 殺害へ向う物語の緊張感を緩め、彼の復讐という物語の路線を希薄にしてしまう危険がある。¹¹⁾ しかしこのセクションは、*The Mansion* が Mink の単なる個人的な復讐劇ではなく、Linda も、それから Stevens も Ratliff も直接、間接に関わる形で、この作品の主題に収斂して行く構成を作り出す上で、重要な役割を担っているのである。この観点に立てば、この作品に組み込まれた二つの短篇、“By the People” と “Hog Pawn”¹²⁾ は、長篇小説の中でおさまりが悪く、物語の進行を途切れさせてしまう、一種の茶番劇 (farce) のような性格を持っているながらも、存在理由はあると思われる。つまり、Ratliff のほら話ふうな術策によって、州議員の Clarence Snopes が政治家とし

て失墜する前者の物語（13章）と、Orestes Snopes と Meadowfill との確執の結果、Stevens によって Orestes の意図が挫かれてしまう後者の物語（14章）は、主題を遠くから支える役割を果していると考えられることもできるはずである。¹³⁾

〔Ⅲ〕

Flem のセクションの冒頭は Mink のセクションの末尾に繋がっていて、作品の大団円に向う緊張感を作り出している。このセクションで作者は、Mink 像を単なる殺人者を越えた人物像に振らませようとしている。例えば彼は、Goodyhay が牧師として指導している新興宗教の小さな組織集団の人たちから、“You look like a preacher.” (p. 264) とか、“Hell, you’re a preacher.” (p. 266) と言われている。Mink が説教師のように見えるというのは、奇異な感じがしなくもないが、恐らくこれは、38年の刑期を務めた63歳の彼に、人生の苦しみと不運を精神の強靱さで耐え抜いてきた人間が発散しうるような、ある静穏な厳かな雰囲気を感じられるということを示している。

しかし彼は、もともとこのような雰囲気を持っていたわけではなく、変化したのである。Ratliff に言わせれば、“that darn little half-starved wildcat” (p. 374), あるいは “the only out-and-out mean Snopes we ever experienced” (T, p. 79) という特質、つまり気性が激しく、手に負えないような片意地な面を持っている人物であった。それに作者はパーチマン刑務所に送られる前の Mink について、“He didn’t believe in any Old Moster. He had seen too much in his time that, if any Old Moster existed, ...He would have done something about. Besides, he, Mink, wasn’t religious. He hadn’t been to a church since he was fifteen years old and never aimed to go again...” (p. 5) と説明していた。Mink にとっての “Old Moster” とは、“a simple fundamental justice and equity in human affairs” (p. 6) への人間の期待を受けとめてくれる、この世の人間を超えた存在のようである。これを神と呼んでもいいだろうが、それは、不運につきまといわれて苦しみ、社会の失敗者としての境遇に落とし込まれている人間が、公平な扱いを求めて、心の底から怒りと抗議の叫びを上げてみたくなるような存在としての神である。¹⁴⁾ 以前この神を信じていなかった Mink は、出所してジェファソンへの道を進んで行く途中、古いピストルをうまく発砲できるかどうか心配しながらも、“I don’t need to worry. Old Moster just punishes; He don’t play jokes.” (p. 407) と自分に言い聞かせている。今はただこの世の “fairness” (p. 106) を求めて復讐を果そうとするのを、神が静かに見守ってくれていると信じられるほど、その存在に信頼を寄せているのである。

この Mink の変化は、彼の黒人に対する態度にも表われている。彼は Houston 殺害でジェファソンの刑務所に入れられたとき、“Are they going to feed them niggers before they do a white man?” (H, p. 258) と考えて白人優越意識を覗かせていたし、Houston の召使いの黒人を見て、“cursing the Negro for his black skin inside the warmer garments than his, a white man’s ...” (p. 11) と呪い侮蔑していた。しかし、パーチマンからメンフィスへ向う途中で寄った飲食店で出会った黒人が、Mink を自動車に乗せてくれた場面 (p. 262) とか、故郷に入って黒人の畑の綿摘みの仕事をし、その家に泊めてもらうエピソード (pp. 399-404) とかが示しているように、かつて黒人に対して持っていた侮蔑の感情から Mink は免れている。“...maybe the new laws even said a nigger could even own a store, remembering something else from thirty-eight years

back.” (p. 290) という彼の視点を通しての作者の説明は、38年前の Mink と現在の彼との違い、変化を示している。

このように38年の間に Mink は変貌したが、その間 Flem は “a prominent banker and financier” (p. 419) となって、大きな館の所有者としておさまった。が、自分の部屋の炉棚に “another Flem Snopes monument” (p. 164) として付けた足掛に足をのせて、 “...not reading, just sitting there with his feet propped and his hat on, his jaw moving faintly and steadily as if he were chewing.” (p. 413) と、40年も前に Varner の店の店員になったときに覚えた身なりと仕草とほとんど変わらない姿で描かれている。この描写にも揶揄した調子が窺えるが、最終章で故人となった Flem に関する次のような説明にも、同じような侮蔑的な揶揄した調子が感じられると思う。

He (the deceased) had no auspices either: fraternal, civic, nor military: only finance; not an economy—cotton or cattle or anything else which Yoknapatawpha County and Mississippi were established on and kept running by, but belonging simply to Money. He had been a member of a Jefferson church true enough, as the outward and augmented physical aspect of the edifice showed, but even that had been not a subservience nor even an aspiration nor even really a confederation nor even an amnesty, but simply an armistice temporary between two irreconcilable tongues.
(p. 419)

Flem は “pure and simple nose for money” (p. 56) でもって、共同体の上流階級に加わり、“respectability to him was just a tool”¹⁵⁾ と作者が評したように、教会の執事の職をも社会的体面を備える一つの道具として使い、自分では運転しない高級車を所有し、館の自分の部屋で、Ratliff が言うところの “the same little chunk of Frenchman’s Bend air he had brought in his mouth” (p. 220) をもぐもぐやっている。このような姿、生き方は、明らかに彼の精神の空さ、内実の欠落を示している。Vickery が言うように、“He has simply lost his reason for living. ...life can offer no hope, no challenge except the perfunctory one of preserving the status quo.”¹⁶⁾ であり、まるで Brooks の言葉を使えば “the hollow man indeed, a ghost”¹⁷⁾、いわば色彩の浮かび上がってこない陰画のような趣きすらある。

第一のセクションの Mink と Houston の場合と違い、このセクションでは明白に対比されていないが、人物像において、内実の空さに合わせて卑小化されている Flem に対して、Mink は社会的、物質的欲望から離れて精神の静穏を獲得し、神への信頼によって精神が支えられているような人物として、肥大化されているように思われる。もし Flem が Mink に殺されることに、‘poetic justice’ とでも呼べるような趣きがあるとすれば、それは Flem に対する Mink の怨念が、最後の裁きを下す神への深い信頼を通して晴らされたように感じられるからである。

Brooks は “He [Mink] is the only Snopes with a sense of honor—the only Snopes, that is, who can feel resentment and lash out against it, imprudently and to his own hurt.”¹⁸⁾ という理由で、彼を英雄 (hero) と考えているが、もし彼が英雄的人物像に近づいているとすれば、それは “honor” という概念からではなくて、“Mink’s is the heroism of the will, a man living out his need...”¹⁹⁾ という意味から考える方が適切であろう。つまり、強い意志の力で苦境をとことんまで生き抜いて、人間としての尊厳を勝ち取ろうとする姿勢を体現しているという意味で、

Mink は英雄的な人物になっていると言いうるかも知れない。

〔Ⅳ〕

Noel Polk は自己の論旨が度を越していることを認めながらも、*The Town* と *The Mansion* において、Flem が “cheat” したのは発電所の一件だけで、*The Hamlet* における彼は、Jody とか Will Varner よりもはるかに “honest” であり、我々の “misplaced hatred of Flem” の結果、彼の行為を不当に評価してきたのではないかと述べている²⁰。なるほど Mink は、現実には二つの殺人という大罪を犯しており、法的には Flem よりもはるかに罪深い人間である。しかし Flem が法律に触れないところでやっていることは、妻子、一族をも自分の目的に役立たなければ冷徹に見捨て、“the old verities and truths of the heart”²¹ を踏みにじるという罪を犯しているわけで、これを Hawthorne なら、さしずめ「許されざる罪」(The Unpardonable Sin) と呼ぶところだろう。人間存在としての心の罪という点では、Mink よりも Flem の方が被告席に立たされるはずである。

Cowley は Faulkner 文学の特徴として、社会的には最も非難されるべき行為であっても、その劇的特質 (dramatic qualities) の故に、つまり、その行為を支えている情熱 (passion) と精神の一途さ (singlemindedness)、あるいは純粹さ (purity) の故に、芸術作品を高めるものとして観察すべきであるという象徴派の教訓 (the Symbolist precepts) が適用されている、と指摘している²²。このあと彼は続けて、Jason, Christmas, Mink の名を挙げ、更に “Even Mink’s rich cousin Flem, the type of everything that Faulkner detested, acquires a redeeming dignity at the end.”²³ と言っている。確かに Flem は、周囲のあらゆる人間を自己の社会的上昇の道具として、冷然と使うことができるタイプの人間の典型という点では、劇的特質を備えている。が、果して Cowley の言うように、彼が最後には、それまでの行為を償うような威厳を獲得しているかどうかは、大いに疑問であるように思われる。

Faulkner は人種統合 (integration) の問題が南部を中心に渦巻いていた1956年2月に、*London Sunday Times* の特派員とのインタビューで、彼の “go slow” という考への批判に答えて、“The European critics are right, morally, but there is something stronger in man than a moral condition.”²⁴ と述べている。ここで彼が言っている “something” とは、“human nature, which at times has nothing to do with moral truths”²⁵、つまり、道徳的、社会的に悪であることを承知していながら、なおかつ時には感情に突き動かされて悪をも犯しうる、生身の人間が内にかかえている劣悪で悲しく暗い特質だと解釈していいだろう。Mink, Christmas, Sutpen に作者が隠微な同情を寄せているのは、単に彼が物語の劇的な展開を図るという創作上の効用から、彼らの破滅型情念を必要としたためでなく、本質的には作者のこの人間性の見方の反映であるとも思われる。彼らのように感情に駆られて時に盲目的になることなく、全てを損得計算で冷徹に見ていこうとする Flem, 作者の言葉を使えば、“an ambition as base as simple vanity and rapacity and greed”²⁶ を持っていた Flem は、作者の同情からは遠い存在になっているのは間違いない。

最後に触れておきたいのは、Mink が最後に戻って行く場所は、Polk が主張するように「老フランス人屋敷」(the Old Frenchman’s Place) かどうかという問題である。もし彼の言う通りであれば、“the trilogy comes full circle, thematically and narratively”²⁷ となるかも知れないが、

Mink が帰って行くのは、やはり彼のかつての家の方が適しい。というのは、Stevens と Ratliff が Mink を見つけに行こうとするときの会話の中で、Ratliff が “What else has he got but home?” (p. 418) と言い、外郭すら残っていない彼の家には “cellar” (p. 418) があると述べており、そして実際に彼らが Mink を見つけるのは “the old cellar” (p. 432) という筋の展開になっているからである。その上、伝説化されていた物質的栄華の象徴であり、Flem が社会的上昇の手段として使った「老フランス人屋敷」よりは、Mink がパーチマンに行く前に住んでいた家こそ、彼が帰ってひっそり身を横たえるに適しい場所だと思われる。Flem が自己の夢の表象であり、その記念碑であった館 (p. 202) で、何の抵抗も示さずに殺されたように、Mink は “the hard savage years of his hard and barren life” (p. 290) の記憶がしみ着いていた彼のかつての家で、死の世界に誘い込もうとする大地に横たわって、“the folks that had the trouble but were free now” (p. 435) に満ちている死者たちの世界の仲間入りをする、というのが作者の意図ではなかつただろうか。

Flem の死後、彼の館は Linda の希望と努力によって、ロス・アンゼルスに住んでいる De Spain の血縁に返されることになり、彼女は英国製のジャガーに乗ってジェファソンを去って行く。これには Faulkner が、スノーブイズムの記念碑的人物である Flem を創り出した作家としての責任を取って、きれいにスノーブス一族の物語に決着をつけておこうとするかのような趣きすら窺えるように思われる。

註

1) William Faulkner, *The Mansion* (New York: Random House, 1959) に付せられた作者自身による「前書き」の中の言葉。以下、本稿におけるこの作品からの引用は全てこの版により、本文中でカッコ内にその頁数を示す。

2) Joseph Blotner, ed., *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977), p. 407.

3) *Ibid.*, p. 433.

4) Joseph Blotner, *Faulkner: A Biography*, 2 vols (New York: Random House, 1974), pp. 1747-48. これらの書評と同じく、*The Town* と *The Mansion* について概して厳しい評価を下している Irving Howe も、こと Mink の部分については、“...whenever Mink Snopes appears, the prose becomes hard, grave, vibrant, and Faulkner’s capacity...for ‘telling stories about men or beasts who fulfilled their destiny,’ comes into full play.” (*William Faulkner: A Critical Study*, 2nd Edition, revised and expanded [New York: Vintage Books, 1962], p. 292) と述べている。

5) Faulkner は *The Mansion* 執筆中の1958年5月にヴァージニア大学で、“The Snopeses will destroy themselves...” という考えを公けにしている (Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958* [New York: Vintage Books, 1959], p. 282)。ちなみに *The Mansion* の執筆開始は1956年11月8日 (Nancy Eileen Gregory, *A Study of the Early Versions of Faulkner’s “The Town” and “The Mansion”* [a Ph. D. Dissertation, University of South Carolina, 1975—Ann Arbor, Michigan, Xerox Univ. Microfilms], p. 101) で、完成は1959年3月9日 (この小説の末尾に付されている日付) である。

6) William Faulkner, *The Hamlet*, 3rd Edition (New York: Random House, 1964) では、pp. 332-333. *The Town* (New York: Random House, 1957) では、pp. 81-82 で V.K. Ratliff がエピソードとして回想している。以後、両作品からの引用は、それぞれカッコ内に H および T と略して記し、そのあとに頁数を示す。

7) Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1963), p. 223.

8) Joanne V. Creighton, *William Faulkner's Craft of Revision: The Snopes Trilogy, "The Unvanquished," and "Go Down, Moses"* (Detroit: Wayne State University Press, 1977), p. 64.

9) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation*, Revised Edition (Louisiana State University Press, 1964), p. 200.

10) Vickery はスノープス三部作を俯瞰して, "...the trilogy conveys as vivid an impression of cumulative change and the inexorable movement of time as the prose sections of *Requiem for a Nun*." (*Ibid.*, p. 193) と指摘している。

11) その危険を防ぐ一つ的手段として, 作者は9章の末尾に "It will be worse than that." (p. 232), 10章の末尾に "It's going to be worse than that." (p. 256) という Ratliff の言葉を置いている。これは, Stevens が Linda と結婚しないことよりも事態は更に悪くなるということ, つまり, 彼女が Mink の刑期短縮を請願して, 彼の復讐に加担することを示している。この Ratliff の言葉は, 15章の終わり近く (p. 360) でもう一度繰り返えされてから, その意味が徐々に明らかになっていく。しかし10章における Linda の言動の変化, 例えば, "I just must be where you are." (p. 238) と Stevens に言っていた彼女が, 約1年後にはパスカダラで "I want you to marry." (p. 252) と言っている変化, あるいは彼女の共産党員証を盗んだのは Flem だと Stevens から教えられること等を考えてみれば, その意味を解明する手がかりは, 十分この章において与えられている。

12) "By the People" は, 1954年10月19日に Harold Ober の手に渡り (*Faulkner: A Biography*, p. 1515), 1年後の10月に *Mademoiselle*, XLI に発表された。"Hog Pawn" の方は, 1955年1月10日に Ober の手に渡っていたが (James B. Meriwether, "The Short Story of William Faulkner: A Bibliography," *Proof*, ed. Joseph Katz, Vol. 1 [1971], 314), 結局雑誌には売れないまま小説に組み込まれた。ちなみにこの1月10日という日付は, Joseph Blotner, ed. *Uncollected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1979), p. 697 では, 3月13日とされている。

13) Brooks は, 13章と14章を飛ばして読んでも, 物語の本質的な重要なものを失うことはないかも知れないが, "But these chapters, by recounting minor victories in the war against Snopesism, may be said to lead up to the major victory with which the novel ends." (*William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*, p. 235) と述べて, この2章の物語の意義を説明している。

14) Brooks は Mink を, "a God of love or mercy" ではなく, "a final justice" があることを信じている "one of Faulkner's many 'Calvinists'" だと考えている (*Ibid.*, p. 232)。

15) *Faulkner in the University*, p. 130.

16) Vickery, *The Novels of William Faulkner*, p. 204.

17) Brooks, *William Faulkner*, p. 230.

18) *Ibid.*, p. 221. 前頁で "...in this last novel of the trilogy, Mink becomes a hero." と言っている。

19) Howe, *William Faulkner*, p. 293.

20) Noel Polk, "Faulkner's Idealism in *The Mansion*," *William Faulkner: Materials, Studies, and Criticism*, Vol. 5, No. 2 (August 1983), 5-7. Polk の主張する点は, Joseph Gold, "The Normality of Snopesism," in *William Faulkner: Four Decades of Criticism*, ed. Linda Welshimer Wagner (Michigan State Univ. Press, 1973), pp. 318-327 の論旨と軌を一にするもので, それを意識的に誇張したものと考えていい。

21) 作者のノーベル賞受賞演説の中の言葉。James B. Meriwether, ed., *William Faulkner: Essays, Speeches, and Public Letters* (New York: Random House, 1965), p. 120.

22) Malcolm Cowley, *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories, 1944-1962* (New York: The Viking Press, 1966), p. 154.

23) *Loc. cit.*

24) James B. Meriwether and Michael Millgate, eds., *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962* (New York: Random House, 1968), p. 261.

25) *Ibid.*, p. 260.

26) *Faulkner in the University*, p. 120. 作者は Sutpen と Flem の類似性を尋ねられて, “Well, only Sutpen had a grand design. Snopes’s design was pretty base—he just wanted to get rich, he didn’t care how. Sutpen wanted to get rich only incidentally.” (*Ibid.*, p. 97) と答えている。

27) Polk, p. 14. この問題については, Brooks の著書 (p. 241) をはじめ, 少なくとも私の目に触れた研究書では, Mink のかつての家と解釈されている。

Abstract

The End of the Snopeses: *The Mansion*

Hisao Tanaka

The Mansion (1959) brought to an end “the thirty-four-year progress of this particular chronicle,” the story of the Snopeses. This paper is primarily a study of Mink’s role in *The Mansion*, paying attention to Faulkner’s intention in his characterization, and a brief exploration of several topics including the nature of Snopesism.

The three sections which comprise this book are arranged to progress toward the subject of the self-destruction of the Snopeses. The first section, “Mink,” emphasizes both his abject poverty and his singlemindedness in “defending his simple rights,” to suggest that his murder of Houston is a step leading to his revenge on his cousin Flem, “a prominent banker and financier,” who had ignored “the ancient immutable laws of simple blood kinship.” The second section, “Linda,” more expanded in time and space than the first, suspends for a time the progress of Mink’s story. The section, however, by alluding at times to contemporary international situations such as the Spanish Civil War which affected Linda’s life, gives the background of the personal change which leads to her aiding Mink indirectly in his murder of Flem. The final section, “Flem,” is an attempt to put into relief the hollowness of Flem’s ownership of the mansion, his attempt to acquire a symbol of “respectability and aristocracy.” Further, by showing Mink’s change in his view of “Old Moster” as well as in his attitude toward Negroes, Flem’s section creates a magnified image of Mink, so that his murder of Flem may produce some sense of poetic justice. If Mink appears to become a hero at the end, it is because he proves to be not so much a man with a sense of honor as a man with the will to live out his bad luck, thereby showing his pride and integrity as a sentient human being.

The murderer Mink is more culpable in terms of law than Flem, who cheats “only once” in *The Town* and *The Mansion*, but the latter is more guilty in that he commits what Hawthorne would call “the Unpardonable Sin” by disregarding “the old verities and truths of the heart” simply for the attainment of his goals. Mink’s passion and singlemindedness may be dramatic qualities to enhance a work of art according to Cowley’s idea of “the Symbolist precepts.” If we sense Faulkner’s subtle sympathy with Mink, however, it is not only because Mink’s character satisfies Faulkner’s artistic vision, but also because of the author’s sympathetic view of human nature, which he terms “something stronger in man than a moral condition.”

The place to which Mink returns at the end is not the Old Frenchman’s Place, as Noel Polk insists, but the house which was once Mink’s: he returns to his old rotten house, a good reminder of “the hard savage years of his hard and barren life,” instead of the Place, which was the legendary symbol of physical splendor and which Flem once used in seeking a higher social position.